

# 堀田昇一「モルヒネ」論

-朝鮮モルヒネ政策を告発した作家-

三上聡太\*

lt020027@ed.ritsumei.ac.jp

## Contents

1. はじめに
2. アナキスト「堀田正一」
3. 在日朝鮮人労働者とともに
4. 「モルヒネ」と朝鮮モルヒネ政策
5. 対抗言説としての文学
6. おわりに

## Abstract

This paper focuses on Hotta Shoichi's *Morphine*, in order to consider how a Japanese novelist depicted Japan's morphine policy in Korea. Although the proletarian novelist Hotta Shoichi is rarely discussed today, I will identify the path that led to his interest in the morphine problem among Zainichi Korean laborers as part of his own process of self-formation, which took him from anarchism to syndicalism, and finally to a commitment to Marxism. By this time, Hotta had already published several works based on his origins as a worker, but *Morphine* was a unique work, as it entrusted subjectivity solely to the characters of Zainichi Korean laborers. Taking as its theme the potential for solidarity between Japanese and Korean workers, *Morphine* offers a portrait of Korean workers employed in Japan under harsh conditions, as they reproduce their labor using morphine. Their fate, underpinned by Japanese policy toward morphine on the Korean peninsula, reveals the schema of Japanese colonial rule. In the prewar era, the Korean peninsula was both a major opium-producing region for Japan, and a site of morphine consumption. This paper locates Hotta's *Morphine* as part of a counter-discourse problematizing Japan's morphine policy.

\* 立命館大学GCOE 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点。

Key Words : 堀田昇一、プロレタリア文学、在日朝鮮人労働者、朝鮮モルヒネ政策  
(Hotta Shoichi, Proletarian novel, Zainichi Korean laborers,  
morphine policy in Korea)

※本稿の「朝鮮」という表記は今日では不適切だが、作品と同時代の用例としてこれを用いた。

## 1.はじめに

2007年8月17日、NHKのドキュメンタリーで日本の阿片政策についての特集がなされた<sup>1)</sup>。戦前期、阿片への国際的な規制が高まるなか、その利益に注目した日本は、中国の旧占領地をはじめ、旧満洲、蒙疆で阿片政策を開始、これらをして『特殊権益』と位置づけた。この『特殊権益』はついに戦争末期まで手離されることはなかったが、一方で戦争が終わると同時に、証拠はあらかじめ消された。こうして人々の記憶からも消えていった阿片政策であるが、近年になってさまざまな資料が見つかってきた。日本の阿片政策が中国に対してのみならず、〈外地〉と呼ばれた朝鮮や台湾、樺太でも展開され、それによって多くの利益を得ていたこともわかってきた。今ようやくこの問題は、研究の途についたのである。

日本の阿片政策は、同時代においてもほとんど批判に晒されることはなかった。ごく一部で、社会運動家らによる反対運動もみられたが、それらは今日省みても十分なものとは言えない。もちろん情報が限られていたのもあろうが、それ以上に、日本の阿片政策が害毒であるという認識自体が欠けていたのである。だから、外国から国際法違反を訴えられながらも国内の世論は傾かず、阿片政策は続けられていった。

しかし同時代の文学は、阿片政策への対抗言説として機能していた。戦後、竹内好は林語堂『Moment in Peking』の同時代における批判性に言及し、1941年に出版された日本語訳版について、いくつかの部分が削除されていることを指摘している<sup>2)</sup>。同じような見方を、すぐさま日本の文学にあてはめることはでき

1) NHKスペシャル『日本軍と阿片』(2007年8月17日放送)。

ないにせよ、当時の日本人作家たちがどのような言説によって日本の阿片政策を描いていたかについては、なお考えられるべき問題として残されているだろう。本稿ではその問いに対する試みとして、堀田昇一とその作品「モルヒネ」をとりあげてみたい。

## 2. アナキスト「堀田正一」

堀田昇一は日本のプロレタリア作家で、はじめ日本無産派文芸連盟にわり、日本プロレタリア作家同盟に加入した作家である。そのように文学史上は位置づけられる。彼を戦旗派作家の一人としてまとめている新日本出版社版『日本プロレタリア文学集』<sup>3)</sup>の解説には、彼の代表作「奴隷市場」(『戦旗』1930・9-11)が彼の自由労働者としての来歴にもとづいていることなど、いわゆる労働者作家としての出自がわずかに語られているが、作者存在については見えてこない。

こうした堀田の来歴をさぐってゆく上で、さしあたり糸口となってくるのは、彼とよく似た名前のアナキストである。手はじめに『近代日本社会主義運動史人物大事典』<sup>4)</sup>で彼を引くと、その下には、

堀田正一 ?- 「野蛮人社」に加わって活動していた。1926(大正15)年4月、巡査をなぐって日本橋堤署に29日間拘留された。28年、「AC労働者連盟」に加わった。日常闘争・階級闘争を主張する文学青年だった。のちにボルに転向し、小説「パンテオンの丘」を書いた。

という人物が確認される。ここまでは堀田が後年発表した「自由が丘パルテノン」(『人民文庫』1937・1-5)が、ここで言われる「パンテオンの丘」と似ているということ以外、共通点は見出せないが、後の堀田の『日本共産党中央委員会への要望書』<sup>5)</sup>を読んでゆくと、「堀田正一」なるアナキストが彼自身のことであった可

2) 竹内好(1949)『中国のレジスタンス—中国人の抗戦意識と日本人の道徳意識—』(『知性』1949・5).

3) 『日本プロレタリア文学集・19「戦旗」「ナッフ」作家集(六)』(1985)新日本出版社.

4) 『近代日本社会主義運動史人物大事典』(1997)日外アソシエーツ株式会社.

能性がでてくる。

この資料については、今少し補足しておかなければならない。すでに松元眞にも紹介されている<sup>6)</sup>この私家版の小冊子は、江口渙『たたかひの作家同盟記』に「スパイH」と書かれた堀田が、その反論として書いたものである。江口渙はもちろん、日本共産党にもこのことについて謝罪を述べるよう附されており、党の各支部にも送りつけるため一五〇部ほどを印刷したとしている。もともとは江口渙によってプロレタリア文学作家としてデビューすることとなった堀田であったから、ここで江口への反論にあわせてそれまでのいきさつを語っている。いわば堀田昇一の半自叙伝ともいべき性格のものである。

まずここで堀田は「一九二七年、二八年頃、僕がまだアナキスト時代に、芝浦で失対人夫として働いていた頃 […] AC連盟というグループをつくっていた」と自己言及をしている。これについてはその当時の同志であった横倉富次が「黒色自由労働者組合は、七八名で発足した。この人々は別に思想団体「野蛮人社」の同人と合同してAC労働者連盟なるものを組織していた」と回想し、その中の一員として「堀田正一」をあげているから裏付けがとれる<sup>7)</sup>。残念なことに、この「AC労働者連盟」の当時の活動について今はほとんど知るすべがないが、そのかわり、ここで言われる「野蛮人社」からは当時の堀田をある程度知ることができる。

アナキズム系の小結社である「野蛮人社」は、労働組合である「黒色自由労働者組合」の同人とともに活動していた。戦前の日本のアナキズム運動でこうした住みわけは珍しいことではない。堀田は中心的な位置にいたらしく、当時の「黒色青年聯盟ニ関スル調」<sup>8)</sup>という当局の調査では、加盟人数五〇名うち堀田がその代表者として書かれている。また当時を知る水田ふうが「野蛮人社」について、「野蛮人社いう、その名づけ方からしてある程度その運動的性質を示唆しているかもわからんけど、けっしてインテリではない若者、ブタ箱ぐらいなんとも思わへん、放

5) 堀田昇一(1996)『日本共産党中央委員会への要望書「たたかひの作家同盟」の側面史 一江口渙のデマに抗議する一』私家版。

6) 松元眞(2009)「堀田昇一の闘い」『平林彪吾とその仲間たち』図書新聞。

7) 横倉富次(1967)「黒色自由労働者組合とA・C・労働者連盟の思い出」(『労働と解放』1967・3・25)『戦後アナキズム運動資料 第8巻』(緑陰書房 1990・11)。

8) 内務省警保局(1927)「黒色青年聯盟ニ関スル調」『社会運動の状況』。

埜無頼のいわばルンプロ・アナの群れ。」と回想しているように<sup>9)</sup>、アナキズム運動の退潮とも重なってゆくこの時期、『野蛮人社』には略(掠)で生計をたてる青年アナキストたちが多く存在した。『黒色青年』の消息欄には、堀田が巡查を殴り拘留されたこと<sup>10)</sup>など、若かりし堀田を伝えるエピソードが残されていて興味深い。しかし一方で『新しき村』に共鳴したり、同志からは『ボル臭かった上に文学青年的』と見られていたふしもあるから、この頃から堀田のその後の方向性はある程度示唆されていたとも考えられる。

「堀田正一」の変名は、ところどころに見ることができるが、少し時期が下ると、当局の資料でも本名として登場してくる。思うに『堀田正一』は、アナキスト時代に政治的な必要から用いた仮名だったのではないだろうか。管見の限りであるが、彼がアナキズムから離れてゆくあたりから『堀田正一』の名も消えているように思われる。たとえば『黒色自由労働者組合員ト東京自由労働者組合員トノ争闘事件』<sup>11)</sup>では実名で、『昭和四年三月黒色自由労働者組合ヨリ脱退シ、東京自由労働者組合共産主義ニ加入シタル堀田昇一—派と残留組ノ間ニハ兎角悪感情ヲ以テ経過シ来リタル』と、彼が黒色自由労働者組合から東京自由労働者組合へとその立場をシフトしてゆき、両組織の確執の渦中にあったことを報告している。この頃、自連系の黒色自由労働者組合は衰退期にさしかかっており、一方で東京自由労働者組合は都市自由労働者組合との合流によって勢いを増していた。そうしたことへの反感が、堀田ら離脱グループにもちこされたことは想像に難くないだろう。自連側は1929年8月1日付の『自由連合新聞』<sup>12)</sup>で、芝浦紹介所付近において「黒色自由の組合員が東京自由の堀田を打ちノメした」とも書いている。

この頃のことになると、『奴隷市場』などの初期作品の中では常套的に描かれてくる。堀田昇一は『奴隷市場』の中で、『河上』という人物を自己に重ね、『アナ

9) 水田ふう・向井 孝(2006)『女掠屋リキさん伝』『黒』発行所。

10) 『街頭牢獄』(1927)(『黒色青年』1927・5・5)に『野蛮人社の堀田君他三名大島旅行から帰った四月初旬の某夜巡查をなぐつたとやらで日本堤署に拘留廿九日』という記述がある。

11) 『黒色自由労働者組合員ト東京自由労働者組合員トノ争闘事件』内務省警保局『社会運動の状況』(1927)。

12) 『失業者の飢餓を前にボルの『労働券』独占 黒色自由で叩きノメす』『自由連合新聞』(1929・8・1)。

アキストの頃を思えば冷や汗が出る」として過去と決別し、かわりに『関東自由』（関東自由労働者組合）での活動に組合運動家としての再出発を見出している。ここで『河上』に語られる、組合員としてのエピソードは、闘争のなかで成長してゆく堀田自身の姿なのである<sup>13)</sup>。

### 3. 在日朝鮮人労働者とともに

堀田のアナキズムへの決別は、ひとまずサンジカリズムの方向へと彼を駆りたてたと見てよい。

ここで堀田が労働者として加入した東京自由労働者組合については、在日本朝鮮労働総同盟とともに関東自由労働者組合を結成し、日朝にまたがる労働争議をさかんに行った労働組合として今日評価されている。当時の関東自由労働者組合については松本洋一が、『在日朝鮮人労働者との連帯を推進したきわめて先進的な事例』としているように、組織的な連帯という意味では日本の労働組合史のうちではほとんど唯一である<sup>14)</sup>。

実際に、堀田昇一が加わっていた当時の関東自由労働者組合では、組合員の半分が在日朝鮮人労働者であったこともあってか、低賃金や差別待遇といった彼らの労働条件を改めるよう当局に訴えるなどの活動が目立つ<sup>15)</sup>。こうした堀田の経験は『奴隷市場』にもさかんに描きこまれており、

永岡が、まるで労働者には『国境がない』ことを『身をもって』証明でもするかのように、組合のピラやニュースが出る度にそれを鮮人労働者のところへ持って行ってやった。／「おい、こいつを読んでくれ！」／日本語でそう言って渡すと、相手は鷹揚な態度で受取ってしばらくそれを見てゐるが、判らないと見えて、鼻をかんだ

13) 堀田昇一はのちに彼の主催する文学雑誌『槐』の対談の中で、「俺なんかアナキストからマルキストへ転向し、都合二回転向してゐるからな」という言葉を漏らしている。この「転向」が、彼にとっていかに大きな転換であったかを示唆するものだろう。

14) 松本洋一(1977)『関東自由労働者組合と在日朝鮮人労働者』、『在日朝鮮人史研究』。

15) 『東京自由労働者組合協議会 大会に決議せる要求九ヶ条を当局に提出す』、『日本社会運動通信』1928・11・9)。

り、まるめて捨てたり、破ったりした。

と、やや図式的ではあるにせよ、日朝労働者の連帯がテーマとして扱われている。

特に、ここで堀田が問題化しようとしている使用言語については、在日本朝鮮労働総同盟側からも労働者間のニュースなどの朝鮮語版を作成するよう提案があり<sup>16)</sup>、またプロフィンテルン(赤色労働組合インタナショナル)第五回大会後の日本委員会でも『至急、朝鮮人労働者の間に活動する各組合組織によって管理される朝鮮語委員会を、上から下まで設立しなければならぬ』と決議されている<sup>17)</sup>。『奴隷市場』がこれらの動きに先行して同じ問題を扱っていることから、堀田がどれだけ組合活動に深く関わり、運動の現状を把握していたかは想像できるだろう。

さて、この使用言語の問題について『奴隷市場』では、

永岡は次の委員会に『朝鮮語アジピラ作成の件』を提案しなければなるまいと思った。／彼の頭の中には朝鮮の同志、李や金や朴の顔が浮かんで来た。彼等は何れも朝総(在日本朝鮮労働総同盟)の闘士だ。朝鮮語のアジピラぐらいなんでもないさ。

と、日本語の通じない在日朝鮮人労働者のために、活動家の「李」や「金」、「朴」らの協力で朝鮮語版のピラを作成するという運びになっている。作品は最後に、そのピラが彼らのアジテート中に配布されるというカタルシスへと向けられており、堀田はここで関東自由労働者組合の赤色労働組合主義ともいうべき立場を明確にしている。堀田がどの程度これら実在の運動家たちと接触していたかはわからないが、「モルヒネ」へとつながる堀田の在日朝鮮人労働者への問題意識が、この関東自由労働者組合での活動体験によることは間違いなさだろう。

16) 在日本朝鮮労働総同盟(1927)『協議会加入を前提とする朝鮮総同盟解体、再編成の意見書』、『日本社会運動通信』。

17) プロフィンテルン第五回大会決議『日本に於ける革命的労働組合の任務』(『インタナショナル』1930・12)。

もっとも私は、先に引用したようなくだりを、双方向的な日朝労働者の「連帯」として読むのには躊躇いもある。おそらく作品は、1928から1929年の状況を描いていると思われるが、すでにこの頃、在日本朝鮮労働総同盟はコミンテルンの一国一党方針によって、民族独立運動を取り下げ、もっぱら日本国内の階級運動に合流せざるを得なくなっていた。

この後、在日本朝鮮労働総同盟は民族解放路線の放棄を宣言し、全協側に組み込まれることとなるわけだが、殆どそれは、日本人労働者の中に在日朝鮮人労働者が「同化」してゆくことにすぎなかった。堀田のオプティミズムを支えているのは、そうした日本人労働者の側からの連帯であることは否定されない。この時点での堀田は、日本資本主義による被圧迫民族でありながら、日本の階級闘争の同伴者として加わらねばならないという矛盾した関係性までは描こうとはしていないのである。

#### 4. 「モルヒネ」と朝鮮モルヒネ政策

「モルヒネ」は、1933年4月に『中央公論』上に掲載された。作品は、在日朝鮮人労働者「崔權庸」が、ブローカーの「可建林」という男にタコ部屋へと連れてゆかれるところからはじまる。この、作品の主人公である「崔權庸」は、自身の父親をモルヒネ中毒で失い、その田畑を売った金で日本に渡ってきたという設定である。耐えかねるほど不衛生なバラックの中では、住み込んでいる同胞の殆どがモルヒネ中毒になっている。その惨状を目の当たりにして「崔權庸」は引き返そうとも考えるが、他にあてのない彼は「可建林」に言われるがまま働くこととなる。

次の場面では、「崔權庸」はすでにモルヒネ中毒となっている。彼が日に日にモルヒネに溺れてゆく一方で、「可建林」の失業登録を借りなければもはやどの紹介所でもとりあってはもらえず、また、労働にありつけなければ「親方」に支払うモルヒネ代を工面できないという状況が彼に立ちはだかる。そんな中、モルヒネが切れたときの苦痛を恐れるあまり、親方に雇われている不遇の女性「朴在玉」にさえずがりつくほど、彼はモルヒネにむしばまれてゆく。



作品の後半で「崔權庸」は、目黒川の改修工事で「許昌秋」という労働者と知り合う。「許昌秋」は、親方が自分の雇った労働者たちにモルヒネを高く売りつけていることや、また働けなくなった労働者に泥棒をさせていることなどを聞かされる。彼らのグループから、日本が朝鮮へとモルヒネをもちこんでいることも知らされた「崔權庸」は、日本でモルヒネ中毒となった自身と、朝鮮半島でモルヒネ中毒となった父との因果関係を、朝鮮モルヒネ政策の図式として理解してゆくのである。

作品の背景となっているのは、おそらく1929年から1930年にかけての冬であろう。失業対策事業としてとられた目黒川の改修工事の着工が同年にあたるが、在日本朝鮮労働総同盟の解体は1929年12月であるから、作品の終わりでは少なくとも1930年となっていなければならない。作品はつまり、昭和大恐慌まったただ中の東京を背景に、自由労働者たちの群像を追うているのである。

堀田が「奴隷市場」の続編として発表した「冬近く」(『会議』1931・10)が、「モルヒネ」の時制とパラレルに対応していることも、或いは看過すべきではない。「奴隷市場」の終わりでは、北方へと季節労働に向う労働者たちが描かれているが、「冬近く」ではその労働者たちが再び解雇され、冬季失業者として東京の自由労働組合へと戻ってくるという設定からはじまる。ここでは「奴隷市場」の「河上」のもとで運動家として成長した「鉄」という若い労働者が主人公として描かれている。「モルヒネ」は、これら二作品の中ではあくまで同伴者的な位置づけにすぎなかった在日朝鮮人労働者が主体化されているとも言える。

しかしまた、この作品では日本人労働者がただ一人として登場しないという意味では、作品をこれらの先行作品の延長上に捉えることには慎重にならなければならないだろう<sup>18)</sup>。作者はほとんど意図的に、労働者とブローカーはもとより、雇用主に至るまで、すべてを在日朝鮮人の共同体内の関係として描きっているのであり、日朝労働者の連帯というテーマは取り下げられている観がある。このことは作品の大きな問題であると言える。

同時代における作者の言及は殆どないに等しい。唯一、前掲の『日本共産党中

18) 樽尾好が「編集後記」(『槐』昭和13年8月)でふれているように、「モルヒネ」では初期作品の明快さは失われ、内容の暗さが目立つ。

央委員会への要望書』に当時のいきさつとして書かれており、同書によると1932年、堀田は中野署の家宅捜索により29日間拘留され、その中で朝鮮人のモルヒネ患者を目撃したとある。

泥棒をしてひっぱられていた崔という朝鮮人のモルヒネ患者がいて、禁断状態になると、悲鳴をあげて、留置場をころげまわり、糞小便をたれながし、便器をひっくりかえしたりしてあばれるので、バクチか何かで入っていたヤクザが看守の許しを得て、朝鮮人をしばりあげてコンクリートの廊下に一晚ころがしておいたところ、翌朝死んでしまっていたことを憶えている。それを材料にして、僕はのちに『モルヒネ』という小説をかいて中央公論にのせてもらったことがある。

ここからは、堀田昇一が在日朝鮮人のモルヒネ中毒者を目の当たりにし、その惨状から『モルヒネ』を着想したことがわかる。当時の新聞には、こうした在日朝鮮人のモルヒネ問題を扱った記事が多く存在する。例えば『無産者新聞』には、『モルヒネ中毒の朝鮮人労働者 注射器を手にしめめるは誰の罪か』として、日本での生活苦のためにモルヒネ中毒となってゆく在日朝鮮人労働者の事例がとりあげられている<sup>19)</sup>。こうした彼らの多くは、すぐにでも就労しなければ生活を維持できず、また日本人労働者よりも安い賃金で働かねば、労働そのものから疎外されるという状況におかれていた<sup>20)</sup>。堀田が留置場で目撃した『朝鮮人のモルヒネ患者』もまた例外ではなからう。

作品はそうした状況の帰結として、同胞内での搾取の構造を描いていると言える。「可建林」が『崔権庸』に仕事を紹介し、その日のうちにモルヒネを注射するという展開は、彼をモルヒネに依存させておくことで、彼の労働のうちから対価の一部をかすめる狙いがあると言える。そして『崔権庸』を利用している『可建林』できさえも、『親方』に支払うモルヒネ代のために犯罪にしばりつけられているとい

19) 「資本主義の侵略によつて荒らされた朝鮮の農村出の季さんには、工場労働者として働き得る技術が無い。然も自由労働者としてゝも、労働市場は毎朝アブレにアブレる失業労働者で充ちてゐる、状態では、季さんに世間並みの生活を保障して呉れない。[...] 季さんがもう一度注射器を手にして生活苦を忘れようとしなことを誰が保障しよう。」

(『無産者新聞』1926・3・13)。

20) 朴在一(1957)『在日朝鮮人に関する総合調査研究』新紀元社版。

う意味では、この搾取の構造から無関係ではない。「可建林」が留置場からでてきたさい、「親方」が「ほら、ここにモルヒネもおいとくぞ!」と、彼にモルヒネを与えることを忘れないのは、彼をモルヒネに依存させておくことで、利用しようとする狙いがあるためである。

こうした労働力の搾取について堀田昇一は、『社会主義入門』(紅玉堂 1930)の中でもふれている。刊行とともに発禁となったが、ここで堀田は、資本家側は労働者に「阿片のようなもの」を消費させることで労働を再生産させているとくり返し指摘している。近年日本では、日本の阿片政策が強制労働の手段としても計画されていた事実が明かとなった<sup>21)</sup>。それは阿片のもつ依存性によって、阿片患者を労働にしばりつけておくというものだが、「モルヒネ」ではこの関係を、在日朝鮮人労働者たちの具体的な労働問題としてとり扱っているのだと言える。

## 5. 対抗言説としての文学

「モルヒネ」が朝鮮モルヒネ政策への具体的な批判を展開するのは作品の後半部分からである。ここでモルヒネ中毒となった「崔權庸」は、オルガナイザーである「許昌秋」らにより更生を促される。そして彼らの説明によって、「崔權庸」の置かれている日本国内での朝鮮人労働者によるモルヒネ問題と、朝鮮半島での日本のモルヒネ政策が結ばれてゆく。

「實際、僕は朝鮮の兄弟がむざむざモルヒネにやられて、生きながらの死骸になつて行くのをみて、じっとしてゐられないんだ! 僕の生まれた村なんかぢや、日本で煙草屋が煙草を賣つてゐるやうにして、あの毒藥を平氣で賣つてるんだから、ゾツとするよ。そして村長や面長なんか先に立つてモルヒネをやるやうにすゝめて歩くんだからやりきれん。--そのために、朝鮮ぢゆうには何萬人何十萬人といふ人間がモルヒネ中毒になつてしまふんだ。そのかほりに……………  
……………けるんだからね。」

21) 「アヘン患者を炭坑動員 旧日本軍、満州で計画」『中日新聞』(2008・8・17).

この頃、朝鮮総督府専売局は専売用阿片の生産に乗り出していた。「朝鮮阿片令」はこうしてつくられる阿片の流通を規制する名目があったが、そのかわりモルヒネについては黙認するものであった。日本からは二反長音蔵をはじめとする技術者らが訪れ、ケシ栽培の指導にあたった。その結果、朝鮮全道に無許可の違法栽培者までもが続出し、モルヒネは急速に朝鮮半島に浸透していった。

その背景には、気候や地質などのほかに、民度や警察状況といった好条件もあった。日本国内においては治安上好ましくならぬモルヒネも、朝鮮であれば総督府の管轄の下で生産が可能だったのである。

こうした事実について、のちの朝鮮共産党設立の中心メンバーであり、「朝鮮モルヒネ問題」をはじめ朝鮮でのモルヒネ問題を批判していた金俊淵は「朝鮮のモルヒネ問題はとんど世間から閑却されている […] 二三年前迄はつまらぬ荒物屋であった日本人が、今日では堂々たる門戸を張ってモルヒネの薬舗に早変わりしている」<sup>22)</sup>と『東京朝日新聞』に書いている。よってここでの「許昌秋」の語りは、金俊淵をはじめとする在日知識人らを代弁しているとさえ言える。

先の応答のつづきは、「日本の、(以下九十九字省略)たまったもんぢゃないや、ね。」など、肝心な部分は削除されており、何が書かれているのかはわからない。但しここに、日本のモルヒネ政策への告発の核心となる部分があることは間違いないであろう。

さて、こうした「許昌秋」の言葉によって、自己と故国をむすぶ日本のモルヒネ政策を知ることによって階級的な自覚をした「崔權庸」は、

それに又、俺までモルヒネ中毒になつて……何といふことだ!? さうだ、俺は親父の××をしなけりやならん。「×××××××」に對して、敵をうたなけりやならん! そのためには何よりも先に、許昌秋のいふやうにモルヒネをやめることだ!

と決心する。やはり伏字になっているが、ここで「崔權庸」はモルヒネを絶つこ

22) 「鮮人のモルヒネ中毒は世界一の悲惨事」(東京朝日新聞 1921・3・17)、金俊淵については、既に倉橋正直(1996)『朝鮮 モルヒネ問題』、『日本&の阿片戦略—隠された国家犯罪』共栄書房に紹介がある。

とによって、意識的な労働者へと更生してゆこうとするのである。しかし作品は、こうして立ち直ったかに見えた「崔權庸」が、「許昌秋」らの家財を盗んで逃亡するという結末を迎える。それより以前に作品は、「崔權庸」が「可建林」に、盗品を扱う「古物屋」を紹介されるというエピソードを配置しており、これが伏線となっていることは言うまでもない。「崔權庸」はモルヒネを断つことができず、結局は同胞をすら裏切ってゆくのである。唯一「崔權庸」が、彼らの『レーニン全集』までも持ち出していることを光明として見出すこともできるが、おそらくそれは現実的ではないだろう。「汚い水が、いろんな塵芥を浮かべたまゝ、逆に流れていた。」と締めくくられる作品は、あきらかにプロットを暗転させているのである。

このパッド・エンドに対して作者は、「許昌秋」の語りを借りて、

「僕らが産別に整理される前、内鮮人だけは朝總(在日本朝鮮労働総同盟)をつくつてゐた頃、モルヒネと闘へ、モルヒネを撲滅しろ、といふスローガンのもとに、かなり長い間やつたんだけど、たゞ單に、モルヒネを撲滅しろ、といつただけぢや駄目なんだよ。……………にそつて、その中で、はじめてモルヒネ患者も救ふことが出来るんだ」

と説明する。実際に、「朝總(在日本朝鮮労働総同盟)」におけるモルヒネ反対運動としては、金達恒と趙憲永が同時代に「在日本朝鮮労働総同盟大阪西成労働組合」の肩書で日本にいる朝鮮人をモルヒネ中毒から救済するよう大臣に申し出たという記事が残っているので、堀田がある程度の事実にもとづいた設定を行っていることは明らかである<sup>23)</sup>。先にふれたように、堀田の加入していた関東自由労働者組合は、その組合員の半分が在日本朝鮮労働総同盟の労働者たちであり、堀田はなんらかのかたちで、彼らがモルヒネ反対運動を行っていることを知っていたのであろう。

ただここで作品が、産業別闘争に向けての再組織化について描いていると

23) 「内地に居る鮮人は皆モヒ中毒 それを救済して呉れと二鮮人が内相に逢いに行く」(『神戸又新日報』1926・6・27)。

は、にわかに考え難い。作品が『中央公論』に掲載された1934年には、日本共産党の内部分裂と全協のファッショ化によって左翼労働組合運動はことごとく後退していた。よってこの時期、堀田が一産業一組合主義の正当性を説くことには意味はないのである。むしろ堀田は、ついに在日朝鮮人労働者らの組織化が十分になされなかったことへの失望感を、作品において示そうとしたのではなかったか<sup>24)</sup>。私は先に、「モルヒネ」に日本人が一人も登場していないことを指摘しておいたが、この組織論の問題を抜きに、作品が何かを語ろうとしているとは思えないのである。

## 6. おわりに

こうして先鋭な題材を扱った堀田昇一の「モルヒネ」だったが、その内容は同陣営の作家らにさえ届くことはなかった。同時代評として評論家の池田寿夫による言及があるが、「植民地民族の非人間的生活が描かれてゐるにも拘はらず、それが帝国主義的搾取のせいではなく無自覚、蒙昧、伝統病的習慣などに根拠が求められている」と一方的に批判されている。或いは、宮本百合子によっても「作者たちの凜然たる階級的肉薄は感じられない」と、機械論ともいうべき政治主義によって一蹴されている<sup>25)</sup>。

しかしこれまで見てきたように、作品がそのテーマとして描いているのは、モルヒネの生産のために荒廃してゆく朝鮮半島と、日本でモルヒネのとなつてゆく朝鮮人労働者たちの姿である。当該研究の第一人者である倉橋正直は朝鮮モルヒネ政策について、

日本側は、朝鮮における阿片・モルヒネ政策において、2回にわたって、朝鮮人

24) この後の堀田については、転向小説ともいうべき「マイナスの部分」(『人民文庫』1936・4)ともあわせて論じるべきだが、本稿では十分に言及しきれない。

25) 池田寿夫「同志小林の二つの作品その他一決議の実践の課題にふれて一」(『プロレタリア文学』1933・4,5[合併号])、宮本百合子「同志小林の業績の評価によせて一四月の二三の作品一」(『国民新聞』1933・4・6、8-10)。

を利用する。すなわち、第1回はケシ栽培=原料阿片の生産者として、第2回はモルヒネの消費者としてである。

とまとめているが、同時代において言及したものとしては、堀田昇一の「モルヒネ」は他に例がない。また、こうした因果関係を示すのみならず、モルヒネ反対運動の失敗を未組織の在日朝鮮人労働者に語らせることによって、日本の共産主義運動の限界点をさえ示そうとしている。これは作品が、他ならぬプロレタリア文学の〈敗北期〉に描かれたことにもよる。

よって、核心となるくだりが削除されているとは言え、先のような評価は的はずれと言わざるをえない。発表された『中央公論』というメディアから考えても、作品は同時代でほとんど唯一の、朝鮮モルヒネ政策への対抗言説であったとみてよいのではないだろうか。

(本論は、2010年に高麗大学にて行われた「若手研究の未来構築フォーラム」での口頭発表をまとめたものである。)

### 참고문헌

- 池田寿夫(1933)「同志小林の二つの作品その他—決議の實踐の課題にふれて—」『プロレタリア文学』(4,5[合併号]).
- 倉橋正直(1996)「朝鮮モルヒネ問題」『日本の阿片戦略—隠された国家犯罪』、共栄書房.
- 竹内好(1949)「中国のレジスタンス—中国人の抗戦意識と日本人の道徳意識—」『知性』.
- 新日本出版社(1985)『プロレタリア文学集19「戦旗」「ナック」作家集(六)』、新日本出版社.
- 水田ふう・向井孝(2006)『女掠屋りきさん伝』、『黒』発行所.
- 朴在一(1957)『在日朝鮮人に関する綜合調査研究』、新紀元社版.
- 堀田昇一(1966)『日本共産党中央委員会への要望書「たたかひの作家同盟」の側面史—江口渙のデマに抗議する—』、私家版.
- 松元真(2009)「堀田昇一の闘い」『平林彪吾とその仲間たち』、図書新聞.
- 松本洋一(1977)「関東自由労働者組合と在日朝鮮人労働者」『在日朝鮮人史研究』.
- 宮本百合子(1933)「同志小林の業績の評価によせて—一四月の二三の作品—」『国民新聞』(4・6,8-10).
- 日外アソシエーツ株式会社(1997)『近代日本社会運動史人物大事典』、日外アソシエーツ

株式会社.

内務省警保局(1927) 『黒色青年聯盟ニ関スル調』『黒色自由労働者組合員ト東京自由労働者組合員トノ争闘事件』『社会運動の状況』.

横倉富次(1967) 『黒色自由労働者組合とA・C・労働者連盟の思い出』『労働と解放』.

自由連合新聞 『失業者の飢餓を前にボルの『労働券』独占 黒色自由で叩きノメず』(1929・8・1).

NHKスペシャル『日本軍と阿片』(2007年8月17日放送).

❖ 투고일 : 2011.06.30

❖ 심사일 : 2011.07.26

❖ 심사완료일 : 2011.07.28